図書館力研究グループ
研究活動報告

図書館力
～学士力育成に向けて～

早稲田大学　阿部　勝樹

東洋英和女学院大学　池上　道代

法政大学　市川　さやか

中央大学　菅原　衣可

中央学院大学　武藤　恵子

１．はじめにー“図書館力”とは

最初にグループ内で、大学図書館について考えた際に、全員で一致した意見が、“大学図書館は学内でやや閉鎖的な存在に思われがちである”という点であった。

大学図書館は、立地的にみても他の部署が入る棟と独立して存在する場合が多く、業務を行う際にも、他部署と共同で何かを行うという機会が少ないせいか、学内での横のつながりが弱いと言える。学生に対しては、ガイダンス等の様々な取り組みを行っているものの、図書館をあまり利用しない教員や、他部署には、図書館の行っていることが必ずしも知られているとは言えない。

しかしその一方で、大学図書館とは、各学部の壁を越えて、大学に所属する全ての構成員が訪れる場所である。その特性、ひいては大学図書館の持つ資源を活かせば、大学図書館が中心となって、学生や教員、他部署を結びつけ、大学図書館としての力を発揮することができるのではないかと考えたのが、今研究の発端である。

折しも、文部科学省が2008年にとりまとめた「学士課程教育の構築に向けて（答申）」において、一方的に知識を教え込む学習形態から、「学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法」へのシフトが言及されている。また、2010年に科学技術・学術審議会がまとめた「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」では、大学図書館に求められる機能・役割として「学習支援及び教育活動への直接の関与」が挙げられ、「最近の大学においては、学生が自ら学ぶ学習の重要性が再認識され、その支援を行うことが大学図書館にも求められている」と明記されている。これらはどちらも、大学全入時代を迎え、学生や大学が多様化したことで生じた課題、すなわち単位の実質化や、学士力の育成、大学教育の質の保証等の問題を踏まえて出されたものである。

本稿では、学生が主体的に学ぶ際の学習支援という点において、大学図書館だからこそ展開できる支援があるのではないかと考え、考察を深める次第である。そもそも大学図書館には、蔵書、空間、勉強をするための環境、他大学の図書館とのネットワーク、データベースや電子ジャーナル等の情報といった学習をするための豊富な資源がある。そして、図書館職員も欠かすことのできない資源のひとつである。本研究では、これらを組み合わせてできる力のことを、“図書館力”と名付け、この“図書館力”を活用した学習支援について検討したい。現状ではまだ弱い学内ネットワークも、このような意識のもと、図書館員が積極的に外へ出ていくことで、他部署との連携が実現し、全学的な取り組みができるのではないか。

次章以降では、日本およびアメリカでの具体例を紹介する。

２．日本の大学図書館事例

それでは、日本の大学図書館において、現在どのような学習支援が行われているのだろうか。いくつかの事例を挙げ、その特徴を紹介する。

(1) 東京女子大学図書館「マイライフ・マイライブラリー」

（「平成 19 年度 学生支援 GP（新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」採択）

・「滞在型図書館」をコンセプトに学生のニーズに応えた多種なスペースを提供

・学生アシスタントを積極的に活用する学生協働サポート体制

・情報検索ガイダンスなどの、多様な学習支援プログラムを提供

(2) 法政大学図書館

・ゼミサポート制※による情報リテラシー教育

※ゼミサポート制：各学部・各主題別に、担当分野が割り当てられた図書館員が、教員と事前の打ち合わせを行い、授業内でのガイダンスや、選書、レファレンスなどの個別指導を行う。

・ラーニング・コモンズの運営や、学習アドバイザー（大学院生）による学習相談

・教員との協働によるパスファインダーの作成

・学習環境支援センターと連携し、学内の学習施設ガイドマップを作成

▲法政大学図書館 学習アドバイザー

（法政大学ホームページより）

(3) 早稲田大学図書館

・教育研究活動と図書館サービスの密接な連携を図るため、学習支援連携委員会を設置

・アカデミック・リエゾンによる授業支援

・大学の国際化へのグランドデザインに呼応し、図書館ホームページ、館内掲示板の英語版対応や、英語等によるガイダンスを実施

(4) 神田外語大学

・「学習空間としての図書館」をコンセプトに、リラックスして読書が楽しめるスペースやグループ閲覧室等を整備

・SACLA（メディアセンター、ランゲージセンター）で IT アドバイザーやラーニングアドバイザーによる学習支援や豊富な語学教材の提供

▲神田外語大学図書館（2011 年 7 月 :池上撮影）

以上で事例を見たように、日本の大学図書館で行われている学習支援をまとめると、大きく分けて以下の 4 つの要素があると考えられる。

① 学習空間としての図書館の施設・設備の充実

② ガイダンスや講習会による情報リテラシー教育

③ 学習アドバイザー等による学習相談やパスファインダーの作成による学習サポート

④ 学生の研究テーマや授業テーマに沿った資料やデジタル情報の収集・充実

また、効果的な学習支援を行うためには、教員や関係他部局と連携して取り組むことも重要なポイントになっている。

３．アメリカの大学図書館事例

次に米国の大学図書館事例を紹介する。

(1) 南カリフォルニア大学リーヴィ図書館

まず、いち早くインフォメーション・コモンズを開始し、ラーニング・コモンズの先駆けとなって有名な大学である。

リーヴィ図書館では、目的ごとにフロアーをゾーニングし、用途に合わせ棲み分けをしている。また、特徴としては学習支援要員として『学生ナビゲーションアシスタント』が、学習に関する基本的な質問や文献検索、メディアに関するサポート等、ライブラリアンに代わりいつでも利用者へのサービス提供ができるよう対応しており、図書館運営に大きな働きをしている。

(2)ワシントン大学 オデガード図書館

ワシントン大学には沢山の図書館があるが、なかでもオデガード図書館は学部学生専用の学習図書館となっている。

(WA ホームページより転載)

ここでは、サブジェクトライブラリアンが学部学科教員や研究者と密接に関わりシラバスや授業に大きく関与している。また、ライブラリアンにより授業に必要な文献や資料を電子化し、さらに Web ページで講義の文献すべてが掲載されるとともに講義で使用される蔵書すべてが学生に紹介されることで、予習・復習はもちろん休んだ学生にとっても親切なサービスとなっている。また、サブジェクトライブラリアンは文献収集等に関する講義を担当したり教授会にも参加する。

ラーニング・コモンズでは、全般的な学習相談や留学相談、就職相談などをワンストップサービスで提供している。他には、毎年多くの学生が応募し、人気を博している『リサーチコンテスト』[注1]や『コモンブック』[注2]等が企画されている。

(3)マサチューセッツ大学アマースト校 Du Bois (デュボア) 図書館

地下 1 階フロアー全体に学習支援体制を集めた、まさにワンストップサービスを提供できる理想の環境となっている。

(UMASS ホームページより転載)

そこには Writing Center があり、特別な指導を受けたチューターが常に待機しており、学生にレポートや論文の指導を行っている。

Academic Advising & Career Service では、学業に関する相談・留学相談・就職相談等もできる。また、ここでは優秀なサブジェクトライブラリアン(リエゾンライブラリアン)が研究者や教員と連絡を密にし、カリキュラムにも大きく関与している。

特に授業で使うテキストや資料は電子化し学内ネットワークで閲覧可能とする事業が普及しており、OPAC や授業管理、e−ラーニングに提供することで、学生の支援、教員支援にもつながっている。

以上の事例から分かったことは、アメリカの大学図書館は、学習支援センターとして従来の図書館サービスに様々な付加価値をつけ、利用者にとってはこの場所だけですべてが解決し満足できる快適スペース、つまりワンストップサービスが受けられる場となっているということである。

ロジャー・ウイリアムズ大学の マクマラン説 によると、ラーニング・コモンズの９つの構成要素として、下記のサービスが挙げられている。

① コンピュータ・ワークステーション・クラスタ
② サービスデスク
③ 協同学習スペース
④ プレゼンテーション支援センター
⑤ ＦＤのためのインストラクショナル・テクノロジーセンター
⑥ 電子教室
⑦ ライティングセンターなどのアカデミックサポート部門
⑧ ミーティング、セミナー、パーティ、プログラム、文化活動向けのスペース
⑨ カフェおよびラウンジエリア

※ 注1－自分のリサーチのプロセスをエッセイにしてまとめるコンテスト
注2－新入生全員が同じ本を課題として読んだらどうなるかということを基につくられたイニシアティブ

４．日米比較

ここまで、日米大学図書館における学修支援の事例紹介をしたが、ここから日米の比較を行う。 様々な取り組み事例を比較するために、新見槙子氏が「アメリカの学部学生用図書館による学習支援」の中で提唱した 6 つのサービス類型（1．テクノロジーの導入、2．学習形態に合わせた学習スペース、3．学習相談の場の設置、4．学部教育課程への支援、関与、5．教育課程外活動への支援、6．学生の学習成果への支援関与）をもとに米国大学図書館サービスを紹介し、それらのサービスが日本行われているか、どのように行われているのか比較を行う。

サービス類型 1 のテクノロジーの導入については、近年では学生の学習形態の変化に伴いノートＰＣの貸出やデジタルメディア機器の貸出、 さらには双方向的なやりとりや協働的作業が行うことができる機器・アプリケーションが整備されている。また、授業で使う資料やリザーブ図書を電子化し提供する大学も増加している。 日本においてもテクノロジーの導入はほとんどの大学で行われており、 デジタルメディアの貸出についても、導入を始める大学も多くある。一方、双方向的作業の行える機器やアプリケーションの導入は協働学習スペースの完備が進んでいる大学では導入事例が多いことがわかった。

サービス類型２の学習形態に合わせた学習スペースの整備は、近年多様化する学生の学習形態に対応し整備されてきた。日本においても、学生の学習形態の変化に伴い整備を進

めた大学が多数あることがわかった。事例紹介にもあった東京女子大学や神田外語大学の図書館などが具体例として挙げられる。

サービス類型３の学習相談の場の設置については、レポートや研究プロジェクトに取り組む学生を支援するためのデスクを図書館内に設置がされている。この窓口では図書館員だけでなく、大学院生を雇用し協働で学習サポートに取り組まれている。また、窓口だけでなくインターネットやメールで相談を受け付けている大学も確認した。日本の大学でも、東京女子大学の学生協働サポート体制やお茶の水女子大学のラーニングアドバイザーなど、アメリカの図書館のように学習相談を積極的に行っている大学が多数あることが確認された。

サービス類型４の学部教育課程への関与・支援には、リザーブ図書や情報リテラシー教育など様々な形態がある。中にはイェール大学の Bass Library のように、教員に対する授業や課題の設計に関するコンサルタントを提供する大学もある。日本の大学では学部図書室等で学部生向けのコレクションビルディングの実施、情報リテラシー教育を図書館員が担うことが多く行われている。千葉大学図書館の授業資料ナビゲータや、名古屋大学の教員による蔵書整備アドバイザー制度など、各大学が様々な方法で学部教育課程に関与していることがわかった。一方、アメリカの大学図書館のような教員支援を行っている大学は少ないことがわかった。

類型５の教育課程外活動への関与・支援では社会的・文化的事柄、例えば読書の啓発活動やキャリア支援を熱心に行う大学が多くある。アメリカの大学図書館では展示やパフォーマンスが行えるスペースを設ける大学や学生の図書コレクションの表彰などが行われている。また、キャリアに関する資料の提供やキャリア支援窓口を図書館内に設置する大学もある。日本の大学図書館でもキャリア支援や読書活動の支援を積極的に行う大学が増えている。また、学部生を図書館スタッフとして養成することも学生自身の社会的経験を増やす活動であり、お茶の水女子大学図書館をはじめ、このような関与を行う大学も日本の大学には多く見られる。読書に関する支援では教員が学生におすすめの本を推薦するなど多数の大学で実施されている。これらのことから、各大学の特色を生かし様々な課外活動支援がなされていることがわかった。

類型６は学生の学習成果の支援・関与に関するサービスが行われている。例えば、カリフォルニア大学バークレー校では図書館の資料や資源を利用した学部学生の研究プロジェクトを表彰する制度がある。これ以降他大学でも実施されるようになった。一方、日本の大学では一部の大学で実施を確認することができたが、まだあまり浸透していないことがわかった。

以上の比較によりまず、以前は日本のラーニング・コモンズはハコだけと施設面の充実が先行し、それに伴う人的サービス等が追いついていないと言われていたが、一部の大学では大学改革と連動し米国の大学で行われているような充実した学習支援サービスが実施され成功例も多くあることがわかった。 一方、サービス類型４の学部教育課程への関与・

支援のアメリカの事例には教員への教育支援が含まれていたが、日本の大学ではほとんど体系的に実施している大学はなかった。このような教員への支援を難しくする原因として図書館員の専門性の差が考えられます。米国の多くの大学図書館員は図書館修士号を取得し、サブジェクトライブラリアンの場合はさらに専門分野の修士を取得し、大学図書館に直接雇用され、他部署への異動のない専門職と認識されている。このような土壌のもと、専門性の高い図書館員がいるからこそ、教員への教育・研究支援が可能となっている。さらに、教育経験のある人を雇用し、教授法のワークショップを開催するなど、図書館員が教育支援により深く関与するための仕組みがあることがわかった。

一方、日本の大学図書館の場合は、大学の事務職員として雇用される場合が多く、その中で専門性を持ち教育・研究支援にあたることが困難になっている。さらに教授法について学んだり、教員との連携のためのスキルを学んだり教育支援のための自己研鑽をするのも困難な状況となっている。

５．図書館力強化に向けて

アメリカでの取り組みは進んでいる部分があり、日本の大学図書館員はこれまでも参考にしてきた。しかし、アメリカの大学図書館は学修スペース、もしくは資金面などが日本よりも余裕があると推察され、アメリカを参考に、言い換えると真似をするというのも、限界な部分が出てくるのではないだろうかという意見が出た。そこで日本の大学図書館の特色を生かして、何かできることはないだろうかと検討してみた。それが、現在のコンソーシアム間での図書館力の強化というものである。

ここでいう図書館力とは、蔵書数の多さによる力ではなく、どれくらい学士力育成の一助となる機関としての力があるかということである。日本の狭い国土の中で、大学とその図書館はたくさんある。日本の大学図書館には地域ごと、または複数の大学でコンソーシアム、協定が結ばれ、その間では複写料金を学内者と同額にすることや、紹介状不要の相互訪問利用、そして貸出のサービスを行っているコンソーシアムがある。図書館力の強化は、一大学だけでは対応が限界なこともあると思われるため、まずはこのようなコンソーシアム内での利用におけるハードルをさらに下げ、学生、教員が相互利用をしやすい状況にしてみてはどうだろうか、ということが我々の提案である。

コンソーシアム間で協力し、図書館力を上げるにはどのような取り組みができるだろうか。次の３つを挙げたい。

一つには、学生にとって学修の機会を広く与えられるようにする取組として、協同レファレンスによる、より高度な学習、研究支援の提供・情報リテラシーの基礎知識を身につけるためのチュートリアルシステムの協同構築・運用が考えられる。

二つには、図書館の相互利用で、他大学の資料を容易に利用できるようにすることで、各大学において、特色ある蔵書構築を集中、強化することができるであろう。

三つには、それぞれの大学の強みを生かしてサブジェクトを割り振り、コレクションを構

築しあう、支援しあうという形の協力も考えられる。
また、図書館員についてはコンソーシアムで研修や人事交流を行うことで、図書館員養成の機会を設けることができる。 学修支援、教育支援の知識・スキルの他にも、図書館員の減員への対応として、業務に関する知識をコンソーシアムで共有し、大学図書館員の専門性を維持・向上につなげることができるのではないだろうか。

これまでの学生は、所属する大学によって学修の機会に制約を受けている面もある。 国際的に通用する学士としての質保証の動きから見ても、質の保証をするとは一部の大学、学生だけではなく、日本の大学、学生全体の能力を上げないと世界にはアピールできない。

このように図書館の資源を共有し、また連携することで、図書館力を強化することができると考える。そしてこれが、一大学だけではなく、日本全国の大学生の学士力育成につながり、学士の質保証の一助になるのではないだろうか。

最後に、コンソーシアム間で協力という考えを思い立ったのは2011年3月に起こった東日本大震災後の出来事がきっかけであった。大震災後、全国の大学図書館では被災地の学生、教員を対象に、図書館への入館、貸出、レファレンスなど、所属大学の学生、教員と同じように利用ができるとした支援が行われた。大学間というより、図書館間で率先してこのような支援をしたり、または館員がボランティアで、被災地の図書館の復旧を手伝うなどの支援もなされた。これは日本の大学図書館が助け合い、被災地の学生が学問をすることを妨げられないようにという近年にないことが行なわれたように思われる。確かに、被災地の学生、教員の支援をする場合は、人数がある程度限られているという予想があったかもしれない。しかし我々はこれら取り組みを知った時、大学の垣根を取り払い、日本の大学図書館の可能性、言い換えればその取り組みの絆に対し感嘆した。大災害時の有事であるから、こうした取り組みをしたという面はある。しかし、現在の状況は学士の質の保証ができているとはいえないことは国が抱える有事であるということも言える。私立大学ではその大学ごとに特色があるためコンソーシアム間でも協力を深化させることは難しいこと、様々なハードルがあるという声があるのは当然である。しかし震災後に取り組んだ大学図書館間の助け合いが、今後の日本を支える大学生のために、我々図書館員に今何ができるかということのヒントを示したのではないだろうか。

＜主要参考文献＞

1) 中央教育審議会. 学士課程教育の構築に向けて(答申). 2008
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf, (参照 2012-1-27)
2) 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会. 大学図書館の整備について(審議のまとめ)－変革する大学にあって求められる大学図書館像－. 2010
http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/documents/mext/singi201012.pdf, (参照 2012-1-27)

3) 東京女子大学「マイライフ・マイライブラリー」実績報告書（2007 - 2010 年度）
http://library.twcu.ac.jp/sogo/images/gpreport.pdf,　(参照 2012-2-3)
4)「法政大学図書館将来計画 2011-1015」
http://wwwpre.hosei.ac.jp/documents/library/shorai/shorai_keikaku2011.pdf,　(参照 2012-2-3)
5) 大城善盛.　21 世紀のアメリカの大学図書館における情報リテラシー教育 ： 私立大学協会の「図書館変革」と「情報フルエンシー」のワークショップを中心に.　大学図書館研究.　2011.3,　91,　p.　24-34p
6) 呑海沙織,　溝上智恵子.　大学図書館における学習支援空間の変化--北米の学習図書館からラーニング・コモンズへ.　図書館界.　2011.5,　63(1),　p.　2-15
7) 小圷守.　情報リテラシーとラーニング・コモンズ: 日米大学図書館における学習支援(<特集>情報リテラシー).　情報の科学と技術.　2009.7,　59(7),　p.　328-333
8) 茂木良治.　海外の事例にみる e ラーニング学習支援者.　学術研究　:　複合文化学編.　2009.2,　57,　p.　53-62
9) 江上敏哲.　アメリカの大学における情報リテラシー教育活動.　情報の科学と技術.　2009.7,　59(7),　p.　334-340
10) 茂出木理子.　ラーニング・コモンズの可能性魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ.　情報の科学と技術.　2008.7,　58(7),　p.　341-346
11) 米澤誠.　CA1603 - インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援
http://current.ndl.go.jp/ca1603
12) 野末俊比古.　CA1703 - 研究文献レビュー：情報リテラシー教育：図書館・図書館情報学を取り巻く研究動向
http://current.ndl.go.jp/ca1703
13)「InfoCommons and Beyond」
http://infocommonsandbeyond.blogspot.com/
14) 新見槙子.　アメリカの学部学生用図書館による学習支援.　三田図書館・情報学会研究大会発表論文集 2010 年度,　2010,　p.　17-20
15) ヨコタ＝カーター 啓子.　世界基準の図書館情報サービス―アメリカの大学図書館からの視点　第 2 回 図書館＝大学の知的交差点～大学教育改革と図書館の変化.　情報管理.　2008.10,　51 (7),　p.　528-531
16) 山手線沿線私立大学図書館コンソーシアム利用方法
http://www.hosei.ac.jp/general/lib/3rd_ingd/conso.html (参照 2012-2-4)
17) 公益財団法人大学コンソーシアム京都 http://www.consortium.or.jp/　(参照 2012-2-4)
18) JUSTICE　大学図書館コンソーシアム連合

http://www.nii.ac.jp/content/justice/ （参照 2012-2-4）
19）私立大学図書館協会　東日本大震災で被災された地域の大学図書館に対する支援
http://jaspul.org/sinsai/index.html（参照 2012-2-4）